『雲と宙間と先とまた別の』

或る昼、空を見上げたら

雲の階層に気づいた

手前は高速で、奥は音速に、思考の欠片は流れていく

君たち二人が思い浮かぶ

ありがとう。

君たちの言っていた意味がやっとわかった

僕が君たちのほうへ行けないこと

君たちが僕のほうへ来られないこと

それは、

僕がココにいたから

君たちがソツチにいたから

そのままの意味だけど、そのままであることがようやくわかったんだ

ありがとう。

君と、君と、君たちだけの言葉はきくと、

これでもう終わりになる。

僕は

君たち以外の

僕に同じようにクレルその人たちを探しに、旅をしたくなった

いつか遊びにおいて

今度は、僕の世界に

そしたらまた一緒になろう

君たちのおかげだ

ありがとう。

雲の奥には空が見えた

青い蒼い

黒と白の宙間だった

僕は学びを通じた

知識は、色を色と教えてくれた

言葉を言葉と教えてくれた

人を人と教えてくれた

自分の心に穴があることを知った

穴の先には逆三フラスコが見つかった

底には汚いものと

綺麗なものが

くつきり交互に溜まるんだ

何もないのに苦しかった

辛かった

痛かった

それがまた、僕らを区別する

僕らを僕らと刻み込む

宙間の先

そこには黒い銀河があった

透明が詠われていた

無が詠われていた

ねえ、本当の本当にそうなのかな

信じてあげよう

信じてあげたい

すべてが透けていても、

僕らがどこにも落ちないで

立ち続けていることを

何も無かったとしても、

遠くで繋がる誰かの声が

この胸の内に聞こえることを

そのとき

透明の中にある色が、

無の中にある有在が、

信じたとき

僕らの瞳に「気づき」としてやってくる
ほら。見える？

空には、こんなにも鮮やかな色が彩られていた

ここからは独りよがりの皆よがり

僕はさらにもう一步

もう一步、新しく行きたい

旅だ

あてのない旅をしたい

また別の。

真の透明へ

誠の無へ

すべてに触れない場所を目指して

僕は、別の、何かになる

独りの皆も行こう

僕と一緒に、視に行こう

そこで初めて語り合おう

わかち合おう

涙し合おう

僕たちは仲間だった

独りが独りではなくなっていく

弾けて打ち解ける

永い果て

雲と宙間と先と

また別の――

雲と宙間と先とまた別の

2022年11月22日 執筆 (2025年3月29日 改稿)

著者 やさかれい
八坂 零

掲載 芸術の星座